

# 津軽森林鉄道導入と在来林業技術

——伝統技術の近代化をめぐる——

脇野 博

はじめに

- 1 森林鉄道導入当時の伐出技術
- 2 在来伐出技術の体系

3 森林鉄道導入と在来伐出技術体系の変容  
おわりに

## 論文要旨

明治以降の機械化にみられる林業技術の近代化は、在来林業技術と関わりを持ちつつ進められた。本稿では材木伐出工程の機械化の一つである森林鉄道導入の事例を取り上げ、在来技術の機械化過程について検討した。

津軽森林鉄道導入の動機は、在来の運材法の欠点を克服し、国有林を開発することにあった。その在来伐出技術の特徴は、樋出と堤流し（管流の一種）にあった。それに関する評価を見ると、当地方の積雪という自然条件を活かした低コストの運材法であるが、伐出時期が限定されることや木材の損傷という点が問題にされ、旧来の方法が慣習として今だに墨守されている点が批判されている。それでは、この運材法は伝統的な伐出技術体系として存在していたのであろうか。

当地方の伐出技術は①角材等の大径材生産、②樋、堤流しによる運材、③伐木造材から運材までの全工程を柚が行う、④労働組織が存在するという特徴を持ち、近世期に確立した伐出技術体系として存在していた。しかし、明治以降の国有林開発の中で、その技術的限界、即ち自然条件への依存に起因する伐出時期の制約の強さに突き当たり、その限界を突破する新しい伐出技術として森林鉄道が導入された。

森林鉄道導入にあたって在来伐出技術体系を支えた伝統的な労働は、柚が伐出全工程を担うという特質ゆえに、森林鉄道＝機械化によって全面的に否定されなかった。それゆえに、森林鉄道は在来伐出技術体系と矛盾せず導入可能であった。古来よりの習慣といわれた伐出技術が、積極的に近代化できた根拠がここにあった。労働のあり方を媒介にして在来技術と近代技術は深く関わっていたが、津軽森林鉄道の場合は伝統技術が近代化の桎梏にならなかった事例であった。